



Title	意味の身体化 : メルロ=ポンティと認知意味論
Author(s)	中村, 雅之
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1992, 18, p. 27-45
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9585
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

意味の身体化

— メルロ＝ポンティと認知意味論 —

中 村 雅 之

序

1. 客観主義の意味観

2. 語の身振りの意味

3. イメージ図式

4. プロトタイプ理論と基本レベルのカテゴリー

結語

意味の身体化

— メルロ＝ポンティと認知意味論 —

序

近年、「認知意味論」と呼ばれる、言語学・認知心理学・哲学にまたがる新しい研究分野が成長しつつある。認知意味論とは、われわれの言語活動を広く認知活動の一環として捉え、従来、客観主義的意味論（第一節参照）がもっぱら関心を集中してきた命題的・概念的意味が、実は前概念的・身体的基盤をもっていることを明るみに出す試みである、と特徴づけることができる¹⁾。本論では、このような新興の研究分野の先駆者として、まずメルロ＝ポンティを取り上げる。彼の立場は、人間を、身体を通じて世界へと関わる存在として捉え、概念構造は身体的経験にそなわる前概念的構造を基盤にして形作られるとみなす点で、認知意味論的アプローチと軌を一にしている。本論でとりあげる、メルロ＝ポンティと、認知意味論的方法を推し進めるジョンソン、レイコフらの立場にはこうした共通点があるが、その一方でそれぞれの特色をもっており、互いに補い合う関係にある。

本論では、メルロ＝ポンティの初期言語論を非客観主義的な認知意味論に対比させることによって、次のような点を明らかにしたいと考える。メルロ＝ポンティの初期言語論（『知覚の現象学』第一部、第六章「表現としての身体と言葉」を中心とする）は、言語を主題的に扱ったものではなく、彼の身体論に従属しており、この点で言語を主題とした中・後期の言語論に比して二次的な意義しかもたないと評価されることもある。しかし、認知意味論の視角からメルロ＝ポンティの哲学を振り返って見ると、彼の初期言語論が身体論の一環として構想されている点がむしろその長所となる。なぜなら、認知意味論によれば、言語活動は知覚や身体的相互作用などのさまざまな認知活動を母体にして形成され、その制約を受けているからである。一方、認知意味論と対比したとき、メルロ＝ポンティの研究法の独自性は、その論拠の多くを失語症などの精神病理学的症例の研究に負っている点に求められる。本論で彼の研究を取り上げるのは、それが非客観主義的意味論の一先駆であるというだけでなく、言語分析に大きく依存するジョンソンおよびレイコフとは違った角度から、概念構造の前概念的基盤の解明に寄与するものであると考えられるからである。

第三節では、マーク・ジョンソンの提唱する〈イメージ図式〉という概念を、第四節では、〈基本レベルのカテゴリー〉を取り上げる。この二つの概念は、メルロ＝ポンティの「身振りの意味」と同様、概念構造の基盤となる前概念的構造の代表的なものである。これらの概

念を使ってメルロ＝ポンティの初期言語論を解釈し直すことにより、一つには彼の必ずしも明晰でない表現に明確な意味を与え、さらには彼が十分果たせなかった課題を果たすことができるだろう。翻って、メルロ＝ポンティの失語症などの臨床例に関する分析は、認知意味論の主張に新しい経験的根拠をつけ加えてくれるだろう。また、メルロ＝ポンティとの関連を示すことによって、認知心理学や言語学の分野では近年盛んに論議されてはいるが、哲学の分野では馴染みの薄い認知意味論を哲学的文脈のなかに正当に位置づけることになるだろう。

1. 客観主義の意味観

まず始めに、ジョンソンおよびレイコフが描き出す、客観主義と非客観主義の対立という構図を明らかにしておこう。客観主義にはさまざまな形態があるが、ここではその意味観の一部にのみ限定して概観することにした。以下の叙述は、ジョンソンおよびレイコフがそれぞれの著書で述べている客観主義の規定から再構成したものである²⁾。

客観主義によると、世界は客観的な対象、対象の性質、対象間の関係からなる。ここで「客観的」とは、「われわれの心的・身体的活動から独立である」ということを意味する。また、この見解によると、言語自体は意味をもたない恣意的な記号であり（以下でこれを「恣意性テーゼ」と呼ぼう）、言語活動とはこうした記号の操作（計算）である。それ自体意味を欠いた言語は、われわれの認識作用から独立に存在する実在に対応することによって意味を獲得する。したがって、文（または発言）の意味とは、文を真にする（あるいは充足する）条件のことである。文の意味は原子論的である。すなわち、文の意味はその構成要素の意味の関数である。さらに、字義的な意味こそ真正の意味であるから、どのような意味分析も、最終的には字義的な概念と命題に辿りつかなくてはならない。最後に、客観主義者にとって、意味とは文と客観的実在との対応なのだから、われわれの理解活動は客観主義的意味論においては本質的役割を果たさない³⁾。

以上のような客観主義者がとる視点は、「神の眼」が取る視点である。それは現在のような身体構造をもち、そのことによってさまざまな制約を受けるわれわれが取る限られた視点を超越し、普遍的に妥当すると考えられている。客観主義者の意味観には、われわれの身体活動は何の役割も果たしていない。要するに客観主義は、身体を無視してきたのである。このような客観主義的意味観に対して、メルロ＝ポンティ、ジョンソン、ロッシュとレイコフは、それぞれの立場から異を唱える。以下で彼らの主張を順に検討し、それらが共通に指し示す方向を探ることにしよう。

2. 語の身振りの意味

「表現としての身体とパロール」という標題がよく示しているように、メルロ＝ポンティの初期言語論は、言葉の意味の身振りのな次元を明るみに出すことを目的としている。メルロ＝ポンティは、他の主題と同様、言語を扱う場合でも、まず一見正反対の主張をするように見える経験主義と主知主義が共有する前提を暴き出し、そのことによって自らの立場を明らかにするという戦略をとる。しかし、経験主義に対する批判は、本論の主題には直接かわらないので、ここでは主知主義に対する批判に沿って彼の論述を辿ることにしよう。

思考こそ意味をもつのであり、言語は思考の単なる容器あるいは乗り物である、したがって両者の対応は恣意的・偶然的・規約的なものでしかない——主知主義者はこのような言語観を抱いている。こうした言語観の背景には、意味を担う思考と、記号としての言語はともに自足しており、両者が恣意的・偶然的に対応づけられるという考えがある。メルロ＝ポンティが主知主義者に与えている以上のような規定が、前節で見た客観主義のそれと重なることは容易に見て取れるだろう（例えば、恣意性テーゼが共通である）。こうした言語観に対してメルロ＝ポンティは、語は思考の外的な随伴物、「解説すべき記号」(PP,155)ではない、と考える。意味はむしろ語に内在する。言葉も思考もそれ自体で完結した存在者ではなく、思考は言語表現されて初めて完結する (PP,207)。したがって、言葉と意味との対応は、恣意的 (偶然的) なものではない (以下で、これを「非恣意性テーゼ」と呼ぼう)。このことの根拠としてメルロ＝ポンティは、詩的言語を引き合いに出し、詩の情動の意味は、その表現手段と本質的に結びついていると指摘している (PP,218)⁹。

語が思考の随伴物でしかないという錯覚が生まれるのは、一つには、われわれが既成の言語体系の中に投げ込まれており、ほとんどの場合すでに成立した概念的意味だけを相手にしているからである (PP,214)。このような、いったん成立し、固定した意味をもつ言葉の表現や理解には、ことさら努力を要しない。日常生活の便宜や学問上の要求からすれば、このことは当然であるばかりではなく必要でもある。しかし、ここから言葉は思考の外的随伴物であり、理解は透明であるという錯覚が生まれる。主知主義の関心はこの概念的レベルの意味に集中しており、まるで語には概念的意味しか存在しないかのようである。

これに対して、メルロ＝ポンティは、語の意味には概念的意味だけではなく、別のさまざまな次元があると主張する。「語の視覚的意味から語概念をへて概念的意味に至るまで、意味にはさまざまな層がある」(PP,228)。意味の諸層は、すでに成立している、概念的なレベル (語られたパロール) と、生成しつつある、身体的なレベル (語るパロール) に大別することができる。そして、語と意味の対応は恣意的ではないと言うとき、メルロ＝ポンティが念頭においているのは、この身体的なレベルの意味、すなわち身振りの意味のことなのであ

る。そして、意味の内在性、非恣意性テーゼ、言葉と思考の相補性などの主張はすべて、この身振りの意味の次元が実在することを根拠になされている。

「身振りの意味」とは何を指しているのでしょうか。それは単に言葉の運動的・音楽的側面（リズム、イントネーションなど）には止まらない。あるいは身振りで表現できる側面的なことでもない。身振りの意味とは、自己の身体が世界へと関係する仕方である。一言でいえば、身振りの意味は、相互作用の意味なのである。身振りの意味の相互作用性は、知覚の相互作用性に起源をもつ。すなわち、生物にとっては、物理的対象は、「隠れ家」であったり、「食べ物」であったり、「毒物」であったりする（PP,220）⁵⁾。生物の出現以前には単なる物理的対象でしかなかったものが帯びるこうしたさまざまな意味は、環境に対する生物の身体的活動をいわば反射している。言語的意味はこの広く解された意味を母体に行っていると考えられる。意味のこうした相互作用的側面をメルロ＝ポンティは、「身振りの意味」と呼んだのである。

こうした意味は、ある程度共通の身体構造と行動様式を備えた生物が共有するものであって、まったく個別的な「私にとっての」主観的意味ではない。と同時に、われわれの身体活動とは無縁に対象それ自体がもつ意味でもなく、言わば「われわれにとっての」意味なのである。

意味に身振りの次元が存在することは、ある種の失語症においては、患者にとってある関わりをもつ語だけが失われる、という事実からも示唆される。「運動性失語症においては、失われた語と残っている語の一覧表は、語の客観的特徴（長さとか複雑さとか）にはではなく、語が患者に対してもつ値に対応する」（PP,227）。意味は、このようにわれわれの身体と対象との相互作用を基礎にして形作られる。それゆえ、客観主義が焦点を合せる既成の概念的意味とは対照的に、身振りの意味はわれわれの理解活動を抜きにしては論じられない。

意味にこのような次元が存在することを示すために、メルロ＝ポンティは意味消失（意味飽和とも言われる）と呼ばれる現象に言及している（PP,225）。メルロ＝ポンティはこの現象を主観的に分析しているわけではないが、意味消失は近年新たな文脈で論じられるようになり、何よりも身振りの意味をきわめて具体的な形で提示してくれるので、ここで少し詳しく考察することにしたい⁶⁾。

意味消失とは、同じ言葉を数十回繰り返し書いたり、発声したりすることによって、その言葉の意味が不安定になり把握しにくくなる現象である。この現象がじつは身体活動に深く関わっていることは、次のような実験から明らかにされる。例えば、「上げる」という語の反復提示によって意味消失を引き起こす場合、それに伴って腕を上げるという動作をおこなわせると、意味が失われるまでの時間を遅らせることができる（ウェルナー／カプラン、p. 30）。これは、われわれの身体活動が語の意味の形成に与っていることを暗示しているので

はないだろうか。意味を形成するこのような身体活動をわれわれはふだん意識しないが、それは上に述べたように、日常的な言語活動の大部分が習慣的で固定されたものだからであろう。日常的には意識されなくても、身体活動による意味の捉え直しは、つねにおこなわれていると考えられる（ウェルナーらはこれを「マイクロ発生」と呼ぶ）。

意味消失において失われる「意味」、すなわち身振りの意味を、メルロ＝ポンティは「語の表情」とも呼んでいる。（「語は表情をもっている（PP,272）」）。意味消失現象においては、語は突然「よそよそしく」見え始め、初めて見るような姿を取り始める⁷⁾。ここで失われているのは語の概念的意味ではなく、意味の構成要素の一つである語の親しさ、「表情」である。「表情」を、語の知覚的「構造」と言いかえることもできよう。語はわれわれの「潜在的運動」を誘発する。そのような運動が語の意味の理解に（経験を構造化するという意味で）与っている。先に見たように、この潜在的運動は知覚を構造化し、それに意味を与えるものであるから、これが変質するとき、語の表情的知覚も変容する。したがって語の「表情」を構成するのは、このような身振りの意味であると考えられる。

意味消失現象から示唆されるように、言葉の意味には身振りの次元が実在する。しかし、身振りの意味は単に意味の一つの層であるだけではない。意味の身振りの次元は、それを欠いては概念的意味が成り立たないような根源的層である。なぜなら、言葉の概念的意味は身振りの意味の沈殿あるいは残余であり、「語の概念的意味は身振りの意味からの徴収によって形作られる」（PP,209）からである。こうして言葉の意味は、まず第一に、身振りの意味として、すなわちわれわれが自らの身体を行使して、世界へとかかわる仕方であると主張される。すでに述べたように、知覚の場面でわれわれは身体活動によって対象を構造化し、知覚的・運動的意味を汲み取っているという事実を思い起こせば、これは当然のことである。われわれは身体によって、より詳しく言えば、知覚と運動による相互作用によって、世界を構造化する。言語活動とはこのような、身体による世界の構造化の、そしてそのことによる世界の理解の一環なのである。

身振りの意味がこのように世界の構造化であるならば、そうした意味と語との対応も恣意的・偶然的なものではありえない。なぜなら、語もその意味も、共に世界を構造化する仕方であり、どちらか一方だけで完結したものではありえないからである。両項が独立し、完結したものであるときだけ、その間の関係は、外的・偶然的なものであると言える。言語活動とは、あらかじめ成立した対象に名を与えるという営みではない。言語活動それ自体が、構造化によって対象を成立させる活動の半面である。知覚と言語活動のどちらにも、こうした構造化過程としての身体活動が、本質的契機を成しているのである。

さらに、メルロ＝ポンティは色名健忘症の検討を通じて、語の意味の概念的ではない次元を明るみに出している。色名健忘症とは、さまざまな色を一つのカテゴリーのもとに包摂す

る能力の喪失であるが、彼はそれが概念的意味の欠如による思惟あるいは認識の障害ではないと論じている。「カテゴリー分けの活動は、思惟あるいは認識である以前に世界に関わる一定の仕方」である（PP,222）。患者が失ったものは、知的・概念的意味ではなく、語の身振りの意味（生ける意味）である。つまり、カテゴリーは、事例を概念へと包摂することによってではなく、対象に対して一定の「態度」をとることによって形成されると彼は考えるのである。「こうして私は三角形の具体的本質を捉える。この本質はもはや客観的な「諸特性」の総体ではなく、一つの態度の定式であり、世界に対する私の取り組みのある様相、一つの構造である」（PP,442）。

以上のように、メルロ＝ポンティは、意味のさまざまな層から身振りの意味の次元を明るみに出し、それがわれわれの世界内存在としてのあり方、いやむしろ「世界へと関わる存在（être au monde）」としてのあり方であることを明らかにしたのであった⁹⁾。彼の主張は、(1) 意味は語に内在し、(2) そのように語に内在的な意味はとくに身振りの意味であり、(3) 身振りの意味とは、われわれの世界への関わり方であり、(4) この身振りの意味が概念的意味の母体となる、という四つの論点にまとめられるだろう。このような言語観が、前節で述べた客観主義のそれとまったく相容れないことは言うまでもない。すなわち、メルロ＝ポンティの言語観は、a) 意味とはまず「われわれにとっての」意味である、すなわち本質的に相互作用的である、b) 意味の成立には身体活動（理解作用）が不可欠である、c) 言語は恣意的記号ではないと考える点で、客観主義の言語観とことごとく対立するのである。

メルロ＝ポンティは以上に見た通り、主として失語症、健忘症などの症例から日常的言語活動を逆照射し、患者に欠けているものから正常な言語活動の本質を浮び上がらせる。次節で検討するジョンソンも、意味の身振りの次元の实在を明らかにしようとする企図をメルロ＝ポンティと共有している。その手法は、身振りの意味を、言語分析などによりながら、メルロ＝ポンティの場合と違って、われわれの日常的な言語活動の文脈内で明らかにする試みであると言えるだろう。

3. イメージ図式

マーク・ジョンソンは、『心のなかの身体』（Johnson,1987）において、意味と合理性の身体的基礎を明らかにするために、「イメージ図式」という概念を提唱している。イメージ図式は、(1) メルロ＝ポンティの非恣意性テーゼを補強し、(2) 彼が一般的な仕方ではしか語らなかった「身振りの意味」のさまざまな具体的構造を明らかにし、(3) 彼が十分に開拓しなかった可能な方向を展開してくれる、という利点をもっている。まず、この概念の一般的特徴を概観しておこう。

イメージ図式とは、知覚的相互作用と運動プログラムに繰り返し現われるパターンである (Johnson,14)。われわれはたえず何らかの経験をしているが、これら無数の経験に一定のパターンがなければ、われわれはそもそも経験を理解できないだろう。イメージ図式は経験にそうしたパターンをもたらすものである。われわれの経験は、身体と対象との相互作用から生まれたこのようなパターンが繰り返し現れることによって構造化され、それゆえ理解可能なものとなる。

したがってイメージ図式は、身体的経験を基礎にしている。しかし、この経験そのものではなく、経験に繰り返し現れるパターンであるので、経験 (知覚やイメージ) よりも抽象的・一般的な構造である。「イメージ図式は、ある種の運動感覚的性格をもっている。つまり、単一の知覚様相に結びつけられない」(Johnson,25)。この点で、イメージ図式は共感的であると言うこともできるだろう。

イメージ図式はイメージや知覚よりは抽象的であるが、しかしその一方で、概念よりは抽象度の低い表象である。イメージ図式はこのように中間的な次元を占めるゆえに、概念とイメージを媒介することができる。この点で、ジョンソンのイメージ図式は、彼自身が明言しているように、カントの「図式」から発想を得ている (Johnson,ch.6)。

さて、イメージ図式がもつこのようなパターン、内的構造の特徴としてまず、連続的でアナログであるという性格を挙げることができる。ここから、イメージ図式は非命題的である、という重要な帰結が生じる。つまり、イメージ図式は内的構造をもってはいるが、その構造は、命題ないし文のように非連続的な構成要素 (単語など) から成るのではない。心理学でよく話題にされる「図式」は基本的に命題の抽象構造であるゆえ「命題図式」と呼ぶのがふさわしいものであり、イメージ図式とは区別されなければならない。イメージ図式自体は非命題的であるが、(身振りの意味がそうであったように) 命題内容や意味のネットワーク、概念体系、あるいは推論の構造などを生み出す母体となる。抽象的理性の推論構造は、これら非命題的構造から多くのものを捨象し、洗練したものにはかならないのである。

また、イメージ図式的構造は柔軟で力動的なものである。図式は一つには、われわれが経験を理解しうるように組織する活動の構造であるという点で力動的である。また図式は、さまざまな文脈で異なった事例に具体化される際、自らも変形を被るという点でも力動的である。

ジョンソンによれば、われわれはこうした非命題的図式を用いて経験を理解している。このような図式の構造がなければ、経験は混沌として理解不可能なものになるはずだという点で、彼の中心的主張の一つである。イメージ図式は定義するよりも (実際、定義は困難である)、例示した方が理解が早い。彼は、道図式、容器図式、バランス図式、周期図式など、さまざまな図式について論じているが、ここでは〈バランス〉図式と〈内-外〉図式を例に

とろう。

バランス図式は、身体的に知られるバランスの経験を基礎にしている。われわれは、誰でも（ふだんそれと気づきはしないが）直立した姿勢のバランスとはどういうものかを知っている。また、身体というきわめて複雑な体系内部のさまざまなバランスあるいはバランスの喪失を経験している（手が冷たすぎる、胃に食物が多すぎる、口が乾いているなど）。こうしたバランスを保つという行為と身体内部の体系的過程の経験を通じて、バランスのイメージ図式が生み出される。そしてバランスの意味は、バランスの経験に繰り返し登場する力動的パターンであるこの図式によって、まず理解されるのである。このようなバランスのイメージ図式を直観的に把握するには、天秤や軸をはさんで対称的な図形などを思い浮かべればよい（ただし、すでに述べたように、イメージ図式はイメージとは異なるという点には注意しなければならない）。

〈内-外〉図式の基盤は、物理的なあるものが他の物理的なもの（容器）の内部にあるという、包含の原初的な経験である。われわれは日常生活のなかで、このような〈容器〉から出入りをするという経験を無数に繰り返している。目覚めると寝床から出、寝室を出て、リビングに入る。チューブから歯磨きを出し、歯ブラシを口に入れて歯を磨く。朝食を口に入れ、家を出る。会社に入ると鞆から書類を出す。こうした経験の繰り返しの中から、あるパターンが生じてくる。これが〈内-外〉図式である。さらには、このパターンを用いて他の（物理的でない、抽象的な）領域の経験も理解されるようになる。心理状態、集団、出来事、議論などもこのパターンにしたがって構造化される。こうして、「中に」、「外に」という言葉の意味は、物理的対象の領域のみならず抽象的対象の領域においても、図式による経験の構造化を基礎にしていると考えられるのである。

以上が、ジョンソンの提唱するイメージ図式の概略である。「バランス」、「内」、「外」といった語の意味は、こうしたイメージ図式によって構成される。したがって、例えばバランスの意味は、客観主義者が想定するように、一般的で字義的なバランス概念によって規定されるものではない。このような抽象的で字義的な概念は、後述のようなバランスの経験や概念の多種多様な事例を網羅できないし、それらの間の結びつき（これは「ポリセミー」と呼ばれる）を説明することもできないだろう。そうした多彩な意味やそれら意味同士の結びつきは、イメージ図式とその変形によって初めて理解可能になる。一般的で字義的なバランスの概念が、バランスのあらゆる事例を包含するというわけではないのである。この点で、本節で挙げるイメージ図式によって結びつけられるさまざまな経験や概念は、次節で検討するプロトタイプに基づくカテゴリー構造を形成していると言える。

前節で検討したメルロ＝ポンティの「身振りの意味」と、以上のイメージ図式概念がほぼ重なり合うことは論をまたない。どちらも身体活動を基盤とし、相互作用的事であること、非

命題的であること、共感覚的なゲシュタルト構造であることなどの特徴を共有している。何よりも両者はともに、経験を構造化することによって、それを有意味で理解可能なものとする働きなのである。それゆえ、メルロ＝ポンティとジョンソンの意味観は、客観主義の意味観と鋭く対立する。客観主義の意味観によれば、それ自体は意味を欠く記号にすぎない文（または発言）に意味を与えるのは、われわれの認知活動を抜きにした実在との対応であった。しかし、メルロ＝ポンティやジョンソンの考えでは、文に意味を与えるのは、身体経験から創出するイメージ図式なのである。

また、ジョンソンの研究は、メルロ＝ポンティが唱える非恣意性テーゼを強化してくれる。〈バランス〉、〈内・外〉などの図式によって創出された意味は、身体活動に基盤をもち、われわれの身体と環境がもつ構造の制約を受けているのだから、決して恣意的なものではない。例えば、「上」は必ず、多いもの、楽しさ、支配するものに関係づけられる。それは、「上」の意味が、事物が増え重なると高さが増すのを見たり、悲しいとうなだれたり、戦いで相手を組み伏せたり、といった物理的・身体的経験に基づいているからである（Lakoff & Johnson, ch.4）。

さらに、身振りの意味の次元が存在することを指摘するだけでなく、イメージ図式によって、身振りの意味が概念的意味をどのようにして創出するかを明らかにしてくれる。メルロ＝ポンティも、身振りの意味が概念的意味として洗練されることを指摘してはいたが、それがいかにしておこなわれるかを説明する概念装置を、彼は持ち合せていなかった。ジョンソンは、この点をイメージ図式の「隠喩的投射」という概念装置を用いて説明してくれるのである。イメージ図式の隠喩的投射とは、源泉領域（source domain 通常は物理的経験の領域）の構造を、標的領域（target domain 抽象的、概念的経験の領域）に隠喩的に投射することである。「隠喩的」とは、源泉領域から、それとは種類を異にする標的領域へと投射されることを指している。（部分から全体へなどになされる同種領域間の投射は、「換喩的投射」と呼ばれる。）先に述べたバランス図式を例にとろう。

バランスは、基本的には身体の姿勢や知覚された形態において経験される。しかし、われわれは物理的対象に関するこの基本的な経験の構造を、抽象的な経験にも隠喩的に適用して、後者の経験に構造を与え理解しようとする。たとえば、物理的対象の文字どおりの重さや力を、色の領域に隠喩的に投射して、色の「重さ」や「力」、およびそれらの間の釣り合いをわれわれは経験することができる。このような色の隠喩的な重さや力の間の複雑精妙なバランスは、特にカンディンスキーなどの抽象絵画を目のあたりにするとき、紛れもない形で立ち現れる⁹⁾。さらに、バランス図式は、体系のバランス、心理状態のバランス、議論のバランス、正義のバランス、数学的等しさなどにも投射される。たとえば、怒りのような感情は、容器内の熱い液体として表象される。この感情が蓄積されると、解放してバランスを回復し

てやらねばならない。われわれが平静であるのは、感情のバランスがとれ、安定しているときである。あるいは、議論をしていて形勢が不利になりそうなとき、われわれは新たな証拠をつけ足すなどして、自分の議論に「重み」を加え、相手方とのバランスを回復しようとする (Johnson, ch.4)。

〈内・外〉図式の投射においても事情は同じである。われわれは、ある集団の「中に入ったり」、そこから「抜け出したり」する。ここでは集団が容器として隠喩的に理解されているのである。あるいは、会話の「中に入れず」困ったり、感情を「外に吐き出し」たり、議論から成果を「取り出し」たり、そこへ新しい論点を「導入」したりする。ここではそれぞれ、会話、心理状態、議論が〈容器〉として隠喩的に理解されている。

さらに、イメージ図式の前概念的パターン (内的構造) は、命題的に記述される論理的含意をもっている。たとえば、先に述べた〈内・外〉図式から、いくつかの含意を引き出すことができる。そのような含意の中から一例を上げよう。容器の中にあるものは、通常隠されており、外から見えない。ここから、外へ出すことは、公にしたり、広く利用に供したり、気づかせたりすることであるという含意が導き出される。こうしてわれわれは、暴露、発表などといった抽象的経験に、「外へ出す」という物理経験の構造を与え、そのことによって非物理的な経験を理解するのである。

以上のようにわれわれは、身体的・知覚的バランスの意味を、心理的・抽象的領域に、隠喩的に投射して経験を構造化し、理解しようとする。こうして、イメージ図式とその隠喩的投射という概念装置は、身体的領域と抽象的領域の関係を理解させてくれる。重要なのは、以上のような表現が単なる修辭的な手段ではなく、経験の構造化という構成的役割を果たしているという点である。われわれは身体的・知覚的経験の構造を用いなければ、他の領域の経験をそもそも理解できない。なぜなら、経験を理解するにはそれを構造化しなければならないが、われわれの出発点となる経験の構造は、身体的相互作用の領域の構造にほかならないからである。

また、以上の分析が客観主義の意味観よりも説明力があると考えられる理由は、次の点にある。これらさまざまな名辞 (「バランス」、「中に」) の意味は、客観主義が想定するようなある一般的・抽象的で字義的な概念によって説明することはできない。まず、そもそもバランスのあらゆる特徴を含む字義的概念を案出することが不可能である。そのような抽象概念は、上に挙げたような多種多様な事例をすべて含むことはできない。またそれらの間にある関係を説明することもできない。イメージ図式を使えば、これら異なった意味を柔軟に結びつけることができるのである。客観主義に対するこのような優位があるゆえに、以上のような考え方は、単なる説明の便法とはみなしえない。このように、バランスの多種多様な意味が一つのカテゴリーをなすのは、共通の核となる字義的意味があるからではなく、同じ (し

かし文脈によって変形を受ける柔軟な)イメージ図式によって構造化されるからなのである。したがって、意味のネットワークは、それ自体が次節で検討するプロトタイプによるカテゴリー構造をなしていると考えられる。

こうしてわれわれは、メルロ=ポンティが「身振りの意味」と呼んだものを、身体的意味を基盤にしたイメージ図式的意味によってより詳細に理解することができる。さらに、メルロ=ポンティが十分に展開することがなかった、身体的領域の意味と、より抽象的な経験領域との関係を理解することができたのである。

4. プロトタイプ理論と基本レベルのカテゴリー

認知意味論的アプローチのもう一つの重要な柱は、プロトタイプによるカテゴリー形成論が明らかにした「基本レベルのカテゴリー」である。プロトタイプ理論は、カテゴリー形成の古典理論が説明しえない現象に着目し、そこから古典理論のアンチテーゼとして登場した。古典理論は、対象の原子的性質からカテゴリーを構成する点、カテゴリーの成員判断を成員すべてが共有するこれら原子的性質によっておこなう点、カテゴリーの内的構造が均質であるとする点などいくつかの特徴をもっている。(以上から明らかであるように、カテゴリーの古典理論も、第一節で述べた客観主義の一形態である。)しかし、本論の主題からすれば、次の二点が重要である。第一に、古典理論によれば、あるカテゴリーは、その成員のすべてが、そしてその成員のみが共有する性質(必要十分条件)によって定義される。言い換えれば、ある対象があるカテゴリーに属するかどうかの判断は、その対象がそのカテゴリーの成員であるために満たさねばならない必要かつ十分な性質に基づいてなされる。(この点は、以下でシュナイダーの症例を検討するときに取り上げる。)第二に、古典理論は、対象の性質はわれわれの認知活動とは独立に、対象自体が客観的にもつものである、とする。古典理論は、カテゴリーの形成に、われわれの理解活動が果たす役割を認めないのである。

(客観主義的な)古典的カテゴリー理論とは逆に、プロトタイプ理論は、対象に固有な属性よりも、われわれの認知作用との相関で決まる相互作用的属性を重視する。相互作用的属性は、環境とわれわれとの相互作用(特定の知覚・運動能力を備えた身体から対象への働きかけと、それに対する対象の応答)の結果形成されるものであって、われわれから独立に外界に固定的に存在するのではない。したがって、カテゴリーの形成にはわれわれの認知能力一般が影響する。

こうした相互作用性は、ロッシュラの言う「基本レベル」のカテゴリーに最も顕著に見られる。客観主義の主張によると、われわれの認識の基礎をなすのは、概念の階層構造の最下位に位置し、内的構造を備えない原始概念である。しかし、ロッシュらは、われわれの認知

活動の基礎となるのは、このような最も下位に位置する概念ではなく、われわれが日常最も多く接する中間的な対象を表わす概念（椅子、犬など）であることを見出した（Rosch et al.; Lakoff, 1987）。基本レベルのカテゴリーが表わす対象は、認識上基本的である特性を数多くもっている。すなわち、同定が最もすばやくおこなわれ、子供が最初に習い覚え、われわれが有意な性質を最も多く知っており、日常会話においてその名が最も多く用いられる対象である（Lakoff, 1987, 46; Rosch et al., 429）。実際、知識はこのレベルで最も多くまた体系的に組織されているのである。われわれはこれらの対象のゲシュタルト的知覚をもち、それらと多くの仕方で身体的に相互作用する。このレベルを出発点にして、より上位の概念（家具、動物など）と下位の概念（パイプ椅子、シェパードなど）が形成されると考えられる。

本論の目的からすれば、この基本レベルの概念がまさに「身振りの意味」をもつという点だが、最も重要である。認知意味論と身体哲学は、概念構造は身体経験をもとにした前概念的構造から生まれる、という主張を共有していた。レイコフによれば、この前概念的構造の二本の柱が、本節の主題である基本レベルのカテゴリー構造と、前節で検討したイメージ図式的構造である（Lakoff, 1987, 267）。基本レベルの概念は、上に述べた意味で概念体系の基礎であり、ここから上位の抽象的・一般的概念も形成される。したがって、結局のところ抽象概念は、身振りの意味づけられた母体をもっていることになる。レイコフの言葉を借りれば、「概念構造は、身体化されているゆえに有意味」であることになるのである（ibid.）。

さて、以上のようにカテゴリー形成が対象と身体的相互作用をおこなう能力に支えられているとするなら、そうした能力を損う病理形態が存在することが予想される。そのような疾患の研究は、プロトタイプ理論を支える有力な経験的論拠になるとと思われるが、筆者の知る限り、こうしたカテゴリーの障害に関する研究は、プロトタイプ理論の文脈内ではまだ十分になされていないようである。そこでわれわれは、メルロ＝ポンティが分析した、患者シュナイダーの症例をプロトタイプ理論の枠組みを適用して解釈することを試みてみよう。

シュナイダーは、「光や色の目に対する関係は、音の耳に対する関係と同じである」といった類比を理解できない。また「椅子の脚」に当たる椅子の部分を指すことはできるが、この表現を隠喩として理解することができない。こうした類比を理解するために、彼はわざわざ概念的分析という迂路を経なければならない。すなわち、「目と耳はどちらも感覚器官であるから、似たような機能をもつはずだ」というふうに推論するのである。われわれは決してこのように、つまり二項に共通なものを取り出してある概念のもとに包摂することによって類比を捉えはしない。メルロ＝ポンティも指摘しているように、シュナイダーは具体的所与をカテゴリーのもとに包摂する能力は保存している、いやむしろ包摂というやり方によってしかカテゴリー分けができないのである。彼は、目と耳はどちらも感覚器官というカテゴリー

に包摂される、それゆえ似た働きをしなければならない、と推論するのだ（PP,148）。ここから、シュナイダーはちょうどカテゴリーの古典理論のようにして類比を捉える、と言うことができる。彼は、概念的な分析によってしか類比を理解することができないのである。では、正常人にとってカテゴリーはどのように捉えられるのだろうか。この点に関して、メルロ＝ポンティは、正常人にとってカテゴリーは「先述定的明証」において「一挙に」与えられ、「考えられる以前に生きられる」のだと述べるに止まっており、これらの表現の意味内容はさほど明確ではない（PP,150）。しかし、プロトタイプ理論からこの症例を見直してみれば、シュナイダーに欠けているのは、身体的相互作用によるカテゴリー編成能力であることが容易に理解される。正常人は、身体的相互作用などによってカテゴリーを作り上げるゆえに、類比を概念的にではなく（つまり述定を媒介にせず）、身体的に（前概念的に）把握するのである。類比を構成する項が、目、耳、椅子など、いずれも基本レベルのカテゴリーに属することもこの解釈の傍証となるだろう。先に述べたように、このレベルで意味の身体性は最大になるからである。こうして、メルロ＝ポンティが分析したシュナイダーの症例は、プロトタイプ理論の経験的根拠の一つとして利用することができる。逆に、シュナイダーに欠けているものは、プロトタイプ理論に照らしてみると明確に浮び上がってくるのである。

結語

以上の考察から得られた成果として以下の諸点を挙げることができる。

まずわれわれは、メルロ＝ポンティの初期言語論を認知意味論の視角から振り返ることによって、そこに新しい光を当てることができた。彼が明るみに出した「身振りの意味」は、イメージ図式やプロトタイプと同様、概念構造の前概念的基盤である。しかし、彼の用語法は、つねに明確であるわけではなく、この点で認知意味論の概念との対照は、彼の叙述を明晰化することに役立ったのである。また、第三節で指摘したように、メルロ＝ポンティは、身振りの意味から概念的意味がどのように生み出されるかを十分に説明することはできなかった。従来、現象学的な身体哲学では、概念的意味とは異なる、意味の身振りの次元が存在することは、繰り返し主張されてきたが、その点の指摘に止まっていた感がある。この点で、ジョンソンの隠喩的投射という概念装置は、身振りの意味を概念的意味に接続する仕方を明らかにした点で、一步を進めたものであるといえる。

一方、メルロ＝ポンティが積極的に取り入れた、失語症や健忘症の臨症例の検討は、認知意味論の文脈では（特にカテゴリー論において）、現在のところまだなされていないようである。今後、こうした症例の研究をも視野に収めてゆくことは、認知意味論的研究にとっても有益であると思われる。メルロ＝ポンティの研究を参照することによって、われわれは認

知意味論の企てを精神病理学研究に結びつける可能性を探ることができるのである。これは、メルロ＝ポンティの方法が言語分析ではなく、いわば身体そのものの現象学的分析に定位していたからこそ出てくる利点であると考えられる。

こうした非客観主義的アプローチ（「経験的實在論」とも称される）が、どの程度の成果を約束してくれるのかは現在のところ未知数である。このアプローチは誕生して日が浅く、その未来を判断するには時期が早すぎる。客観主義的アプローチをも取り込む形でこうした立場が確立するには、まだ残された課題が多くあるだろう。たとえば、ジョンソンの著作で明らかにされた、われわれの世界を構造化する基本的なイメージ図式は、いくつに絞り込めるのだろうか。また、イメージ図式は基本的には空間的な構造ばかりであるが、これらが原理的に役立たないような世界の出来事は存在しないのだろうか。たとえば、われわれの時間経験が空間的イメージ図式を使うことによって歪められたり、量子力学的世界の理解にはイメージ図式による構造化の及ばない側面があるのではないだろうか。こうした探究すべき課題は多いが、しかし少なくとも、命題的知識の非命題的・身体的基盤の研究は、これまで不当に軽視されてきた分野であり、認知意味論的アプローチは、客観主義一辺倒であった従来の研究に変革を迫る射程をもつものであると思われる。

略号

PP=*Phénoménologie de la perception*

注

- (1) 「認知意味論」の基本的アプローチを簡潔にまとめたものとしては、Lakoff, 1988 を参照。
- (2) Lakoff & Johnson の 25 章以下、Johnson, そして Lakoff, 1987 の特に 11, 12, 13 章を参照。
- (3) 客観主義の論点をすべて信奉する哲学者はいないかもしれないが、現代の言語哲学を形作るのに与った哲学者たちはそのどれかを主張している。ここでは、フレーゲ、タルスキ、デイヴィッドソンの名を挙げておけば十分であろう。
- (4) メルロ＝ポンティが唱える恣意性の否定は、ソシュールの恣意性原理の否定ではない。この点に関しては、丸山、第二部・第一章および木田、第五章一節を参照。
- (5) こうした観点をとる者として、他にベルクソンとギブソンを挙げることができる。Bergson および Gibson を参照。
- (6) 新たな文脈とは、ヴィゴツキーに発する「活動理論」とよばれる文脈である。レオンチェフ、ルリヤなどを代表とするこの学派もまた、意味の身体的次元を強調し、われわれの意味付与活動を生成的に捉えようとする。これについては、佐々木、石黒を参照。
- (7) ウェルナーらはこれを、語が単なる〈サイン〉に転化する過程と解釈する。彼らの言うサインとは、指示対象と外的・恣意的に連合する記号である。言語はサインではなく、指示対象と力動的様相を共有する（その意味で外的・恣意的に対応するのではない）記号、すなわちシンボルである。ウェルナーらの言によると、彼らの考えはこの点でラッセルを批判したカッシーラーのそれに近い。ウェ

ルナー／カブラン、p.14、注(3)参照。

- (8) ‘être au monde’ とは周知の通り、「世界内存在」の概念を継承しつつ、身体的志向性の契機を強調したメルロ＝ポンティ流の読みかえである。ここでは本文のように意識した。
- (9) カンディンスキー自身がこのような色の力学について理論的考察をおこなっている。カンディンスキーおよび Johnson, p.83-84 参照。

参 考 文 献

- Bergson, Henri. 1896. *Matière et mémoire* (P.U.F.).
- Gibson, James J. 1979. *The Ecological Approach to Visual Perception* (Houghton Mifflin).
- Johnson, Mark. 1987. *The Body in the Mind* (University of Chicago Press). [邦訳、『心のなかの身体』菅野盾樹、中村雅之訳(紀伊國屋書店)1991年]
- カンディンスキー 1977. 『芸術における精神的なものについて』(西田秀穂訳、美術出版社)
- 木田元 1984. 『メルロ＝ポンティの思想』(岩波書店)
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things* (University of Chicago Press),
— 1988. 'Cognitive Semantics,' in Eco, U. et al.(eds.) *Meaning and Mental Representations* (Indiana U.P.).
- Lakoff, George & Johnson, Mark. 1980. *Metaphors We Live By* (University of Chicago Press,) [邦訳、『レトリックと人生』(渡部昇一ほか訳、大修館書店)1986年]
- 丸山圭三郎 1981. 『ソシュールの思想』(岩波書店)
- Merleau-Ponty, M. 1945. *Phénoménologie de la perception*, Gallimard.
- 茂呂雄二 1988. 『人はなぜ書くのか』(東京大学出版会)
- Rosch, E. et al. 1976. 'Basic Objects in Natural Categories,' *Cognitive Psychology* 8, 382-439.
- 佐々木正人 1987. 『からだ：認識の原点』(東京大学出版会)
- ウェルナー／カプラン 1974. 『シンボルの形成』(ミネルヴァ書房)

THE EMBODIMENT OF MEANING: MERLEAU-PONTY
AND COGNITIVE SEMANTICS

Masayuki NAKAMURA

This paper takes up several notions of 'cognitive semantics' (from George Lakoff, Mark Johnson and many others) and Maurice Merleau-Ponty's philosophy of language in order to elucidate both approaches at the one time. Cognitive Semantics advocates the following theory; Words are not arbitrary signs, but their meanings are 'motivated' by our perception and bodily interaction with the environment. Consequently, meanings (even conceptual meanings) are 'embodied', and thus are necessarily a matter of human understanding. The properties of certain categories are also consequences of our bodily interaction with the world.

Merleau-Ponty also made these claims. Merleau-Ponty and cognitive semantics both try to elucidate the preconceptual structure of bodily experience for conceptual structure, and demonstrate the reality of the embodied, nonpropositional dimension of meaning.

My aim is to place Merleau-Ponty's philosophy of language within the context of cognitive semantics, and thereby to shed light on both approaches. First, by applying the concept 'image-schema' as connecting the network of meaning (Mark Johnson) to the concept 'gestural meaning' (Merleau-Ponty) we can make clear the implication of the latter concept. Also by adopting the notion 'metaphorical projection' (Johnson), we can elucidate the relation of gestural meaning to conceptual meaning, which Merleau-Ponty did not explore sufficiently. Second, Merleau-Ponty's analysis of the psychopathological case, in turn, gives experiential support to the conceptions of Non-Objectivist Semantics, especially in the case of 'basic level categories' (George Lakoff and Elenoah Rosch).